

現代における昭和時代についての意識 (2)

—— 一般人を対象とした定量分析結果から ——

立正大学 浅岡隆裕

1 目的

昨年度の日本社会学会大会に於いて「ノスタルジア」の現代的な出現形態について考察を行ったが、本報告はその後続発表の一つに位置づけられる。パネルモニターを対象としたWEB調査から一般人の昭和に対する意識を定量分析で探るというものである。ここで特に着目したいポイントとしては、①当時の時代体験がある高齢層と全く未知なはずの若年層といった年代による違い、②ノスタルジア(=過去、自分が生きた時代への郷愁)といった動機からではなく、見習う対象として昭和時代に関心があるという人の認識は、他の社会意識とどのように関わり合っているのかの2点である。

2 方法

昭和時代についての認識やイメージの構造を探ることを目的に一般人(インターネットパネル)の調査を実施した。調査対象者は、国勢調査に基づく実勢人数割合に近似させて、調査対象パネルから構成された。調査期間は2016年9月であり、回収標本1,000サンプルに対してクロス集計や因子分析など多変量解析を行った。

3 結果

昭和30年代イメージは「質素」「貧しい」「活気がある」「温かい」が高い割合となっており、一般的に流通している昭和の語りとの親和性が見られる。しかし明治以降の時代ごと(昭和は10年単位)の興味やイメージでみた場合、「昭和ノスタルジア」との関わりで表徴されることが多い「昭和30年代」への興味は際立って高いわけではなく、よいイメージを持つ回答者も多くない(興味16%、よいイメージ14%)。むしろ昭和時代でも50、60年代の方が興味が高く、よいイメージを持つ回答者も多い。

年代別に見た場合、高齢層ではそれぞれ25%前後が昭和30年代について興味があり、よいイメージを持っていると回答している。だがこの回答率はどちらも年代が下がるにしたがって低下している。その一方、昭和30年代は「見習うべき」対象となっている。「見習うべき」対象となっている分野としては「教育・しつけ」「モラル・道徳」といったものが高く挙げられ、倫理・規範の比重が高い。また「暮らし」については、1/3とまとまった割合で挙げられている。昭和30年代から現在にかけて退潮しているものとして、「ものを粗末にしない姿勢」「近隣の人々とのつきあい」が高い割合で意識されているが、特に前者は現代にも必要と認識されている。なお昭和30年代に営まれていた「昭和の暮らし」の全般については、消極的評価を含めると、半数近くから評価されている。

ところで、このような昭和30年代を「見習うべき」対象とするのは高齢層で強くみられる傾向であるが、若年層でも4割が見習うべきとしている。ところが若年層で昭和30年代について見習うことがあるとしている人でも、「昭和30年代」全般についてはよいイメージでとらえられているわけではないことには留意しておきたい。

4 結論

しばしば昭和ノスタルジアと関連付けられる昭和30年代の時代イメージは、さほど特別視されているものではない。しかし昭和30年代を規範的・倫理的な観点から見習うべき対象とする意識、そして「昭和の暮らし」の評価は、調査パネルには少なからず示されていた。若年層における古い時代(昭和年代)の「暮らし方の工夫や知恵を参考にしている」回答者は、調査結果ではごく少数であり、程度の違いもあるだろうが、「昭和の暮らし」へ共鳴を示す層の存在を示唆している。